

ポエムの窓

文・高安ミツ子

翁の人形

高安義郎

むかしむかし遠い国の山の奥
 人形彫りの翁がおった
 小さな庭の片隅に
 壊れ人形の塚があり
 墓にリリンと星の降る晩は
 火を焚き炉端で
 コッポリ コッポリ 人形彫りで夜がふける
 小鮒や猫が龍やらを彫り
 ジジとババと孫共と
 きまつて翁の昔の家族を造ったものだ
 一人暮らして淋しい翁は
 観客のない人形芝居が楽しみだった
 鮒に好かれた庄屋の子猫は
 龍神様に思いを寄せて夜と夜を泣いた
 龍神様は鮒のみごとな泳ぎっぷりに魅せられて
 水と空と岸边はいつも
 逃げて泣き追って恨みの日が暮れた
 それが愉快でジジとババ
 孫共連れて見物に来る
 お芝居はいつもそこで終わっていた

ある時翁は夢に仏のお声を聞いた
 一人暮らしは淋しかろうから
 人形共に命と心と
 明日の朝日に届けさせよう
 翁は目覚めて喜び踊った
 可愛い木彫りの孫共に
 好いて欲しくて是が非と夢中に頼んだものだ
 朝が待てず飛び起きた
 囲炉裏に火を入れ朝日を待ち侘び
 あれやこれや 笑顔と声を想いめぐらし
 遅い朝日を拝んで待った
 やがて白く 連なる峰が浮き上がり
 庭の隅の人形塚と孫子の墓に
 うつすら光が届きかけたその時だった
 翁は狂った者に似て
 朝日を見ずに手にある木彫りを
 赤く黒く火に燃していた
 血を吐いて逝った孫子が脳裏にゆらぎ
 ポロ口涙が灰にこぼれた
 仏様への詫びも忘れて泣いていた
 むかしむかし 遠い国の山の奥
 今もコン カリ
 木彫りを刻む音がする

詩集「むかしむかし」より

ポエムの窓の紹介は十年を越えました。そこで、今回は紹介者の一人高安義郎の詩を取り上げました。誰もが昔話を聞いた覚えはあります。昔話は民衆の中で生まれた伝承物語であり、民話や神話や伝説等があります。人は、それらに郷愁を感じるのは何故でしょうか。昔話には誰でもが願う思いや民衆の持っている生きるための知恵が投影されているからではないでしょうか。今回紹介する作品は全て作者のオリジナルの昔話であります。作者は「ストーリーポエム」と称し情景の美しさや細やかな人の感情の起伏を詩で伝えたいと考え、昔話の形態をとった作品を記しました。二連から孫を亡くした翁が登場します。翁は子供と孫を失った哀しさを拭うように家族や鮒等の人形を彫って人形芝居をしています。三連では、仏様は翁が彫った人形に命の吹き込みを約束します。翁はうれしさで小躍りしますが五連では全ての人形を焼いてしまふのでした。翁は仏様の慈悲で蘇らせた仮初の現実への憂慮と失うことの苦しさを再び味わいたくない死生観が感じられます。家族を失う辛さを運命として受け止めようとしています。そこには、生きることの戦いが続く翁の虚無感すら感じられます。終連では、昔話の世界に翁を戻します。そこから、絶望や哀しみを背負いそれでも孫子への情愛を守り抜こうとする翁がどこかで生き続けているような余韻を感じさせてくれます。人生という時間内で人は得ることと失うことで人格が作られるのかもしれない。哀しい時、心に寄り添って無言で抱えてくれる翁が何処かにいるような気がしてくる作品だと思えます。

ひとりで悩まず相談しよう！青少年相談機関のご案内 子ども家庭110番☎043-252-1152

<http://www.pref.chiba.lg.jp/kouhou/soudan/kodomo.html> (千葉県各種相談窓口(子ども))

千葉県の運営する相談機関です。平日は午前9時～午後8時、休日は午前9時～午後5時に受付しています。児童虐待相談は24時間・365日受け付けています。